

事例 8

予定が変わると不安定になるH男(中学2年生)

欠席等の様子

- 中1 20日
遅刻76回【1校時途中の登校が多かった。】
- 中2 7日
遅刻86回【1校時直前に登校できるようになる。】

学習の様子

- [数学] 計算問題は自分の解き方に固執し、停滞する。
基本的な計算問題を少し理解する。
- [英語] アルファベットと単語は、少し記憶する。
- [その他] ノート等への書字や、視写が困難で覚えることも苦手である。

性格や行動の様子・エピソードなど

- (幼児期) 家業が忙しく、親のかかわりがもてなかった分、暇ができると溺愛された。
- (小学校) 集団で行動することを嫌がり、集団登校せず、遅刻が多かった。
- (同) 友達がいなことを全く気にかけない様子だった。
- 遅刻すると、他の生徒の目をはばかり、隠れながら教室に向かう。
- 何事にも無頓着に見え、時々だっ子のような行動をとるが、プライドは高い。
- 自分の思い通りにならなかつたり、予定が変わると不安定になり、解決できないと先に進めない。
- 興奮すると、落ち着くのに時間がかかる。興奮時に話を聴こうとするとさらに感情が高ぶることもあり、H男の非をはっきり指摘し、厳しく対応するほうが落ち着きやすい。
- 両親は養育の不安から専門機関への相談も考えているが、実現していない。

生徒の理解

集団への不適應は、幼児期における二者関係形成の課題を、思春期になっても残しているためと推測される。H男の自己イメージが実際のH男よりも肥大し、他者からそのずれを指摘されると、自己イメージが脅かされ興奮状態に陥ると考えられる。

援助・指導の方針

- 1 興奮状態に陥ったときには、時間をかけて自分を振り返らせる。
(自己のイメージを再構成させる。)
- 2 クラスメートのH男への理解と支援的なかかわりを促す。
(周囲から単なる「だっ子」に見られないように、学級での存在感をもたせる。)
- 3 授業場面における個別的な配慮
(学習ペースに合わせた課題を設定する。)
- 4 家庭との連携
(両親の心理的ストレスを和らげる。)

保護者の困惑
(中1 1学期)

- ・遅刻が多く、登校しぶりの改善を促すため、家庭訪問を実施した。
- ・朝ぐずるH男への対応に両親は手を焼く。母親はH男へのかかわりの自信のなさに涙を流す。
- ・早朝のテレビ番組を見るため起床し、その間、遅刻は減少した。
- ・教室に入れず、階段下で隠れたり、校門や職員室前でうろうろする。

他生徒の理解
(中1 2～3学期)

- ・対人関係がうまくいかず、トラブルがたびたび起こる。
- ・トラブル時に、学級に対してH男理解を促す指導を行う。
- ・学級で温かく支援する雰囲気がつくられる。
(別室移動時の声かけや所在不明時の対応などにおいて、学級の一人として支えようとする。)

担任との信頼関係
(中2 1～2学期)

- ・興奮時の指導には手を焼くが、厳しい指導にも担任との関係は悪化せず。
- ・周囲のからかいは減少した。
- ・班の仕事分担で、朝の活動の役割を担うと、遅刻せずに頑張る場合もある。

学習意欲と存在感の芽生え

- ・宿題や基礎学力の回復を図る。(家庭学習への保護者の支援)
- ・文化祭におけるクラスメートの評価:「H君は意外に頑張っていた」「分からないことをH君が親切に教えてくれた」(存在感の芽生え)
- ・長時間の遅刻が減った。(1校時途中の遅刻 1校時開始時の駆け込み)
- ・ためらわずに教室に向かえるようになった。

変化と課題

1 変化

対人関係 トラブル時に少しずつ客観的に自分の言動を振り返るようになった。

また、他人に自分がどう見られているかを気にかけるようにもなった。

学習 基礎学力に課題を残しつつも、学習意欲が芽生えてきている。

家庭 学校での指導によってH男が成長した部分を家庭に知らせていくことで、学校との協力的な関係が作れた。

2 課題

朝の生活リズムを定着させ、行動の自己調整力を高める。

基礎学力の回復を図る。

考察

生活リズムの定着には未だ課題が残るが、興奮時の時間をかけた指導と、H男の理解と支援的なかかわりを促す学級指導によって、彼が学級における存在感を少しずつ獲得しつつ、自己イメージの再構成を始めた事例である。なお、H男の思いを受け止め、ともにそれを整理しながら、彼自身が取り組むべき課題を自ら見いだす援助の在り方を探る必要がある。

H男は今

3学期になり、不安定な日もあるが、卒業生を送る会のスタッフの一員として活躍している。